

を訪ねた時には、師の法然上人に関する伝記等はみかけなかったように記憶する。しかし、今回の研究旅行の中心であった法然上人の聖跡（誕生寺、専称寺、法然寺等）には、弟子であった親鸞聖人の絵像や木像等があつて、法事が盛大に行なわれているところさえあつた。このようになった理由としては、この地方に真宗の信者の勢力が強かつたからだ、というだけでは済まされないものがあるであろう。

私は、高校時代に、ある先生が、「親鸞聖人は、法然上人を法然聖人と敬っておられた。それが現在では、聖人と敬っておられた親鸞が、親鸞聖人といわれるようになった。これはなぜであろうか。そのことを考えてほしい」といわれた言葉を思い出していた。親鸞が訪れたことのない法然上人の聖跡に、師の法然と共に弟子の親鸞がいたのである。そして、親鸞聖人の関東聖跡に、法然上人の木像等がないのは、親鸞といえ、そこに法然のいることは、形にあらわす必要のない程に当然のことであるということを示すのであろうか。

それは、人生における真実の出会いの意味を、あますところなく表わし尽す歴史の事実であるといえるであらう。まことに親鸞聖人の一生は、法然上人との出会いの意味を、問い続けて倦まない生涯であつた。

最近、ある先生は、「人間の求道するすがたを譬喩すれば、善導大師の二河の譬喩に尽きると思う。我々は、つねに、水火に譬えられる貪瞋の人生を距てて、西岸の阿弥陀と対面しているのである。道を行く人にとって、師友は、背後の東岸から発

遣する声であることを忘れてはならぬと思う。したがって、もし求道に問題が起るとするならば、それは、背後の師友を自分の前においてそれと自分を比較することによるのであろう」といわれた。まことに教主は教主ではない。師友は、教主と共に東岸から我を發遣する。それが、法然と出会つた親鸞の生涯が、現に今、我々に教えつつあるところであると思う。私は、そのような問題——即ち、求道の、しかして教学の問題を、改めて新らたに課せられたことを憶いつつ、帰洛したのであつた。

道に徹する人

佐々木 亮

旅行二日目、下津井より漁船にて塩飽本島に渡る。いつも見馴れた瀬戸内海ではあるが、いつ通つても良いものだ。それに今日は漁船で、天気も快晴、身体に汐風を受けながら船は出発。銀色に輝く海に青い小島が浮かぶ。何と美しい光景だろう。何と清々しい事か。私にこの素晴らしいさを表現する才能の無いのが残念である。その美しい海を渡って、船は、美しい島塩飽本島に着く。今日は、この島の専称寺——法然上人流罪の地——に一泊する事になっている。

夕食までの一時を散歩、そのあと入浴。風呂場の脱衣場へ行

った時、フト横を見ると、誰かが風呂を沸かして下さっている。「どうも御苦労さんです」と云うと返事をしてこちらを向いた。「アレ、この人は先程下津井まで迎えに来て下さった住職さんだ。」全く驚いた。ズボンを脛のあたりまでもたくしあげて、二つの湯を掛け持ちで沸かして下さっている。この人が住職——。強く胸を打たれた。

食事の用意から、寝所の準備から、なにかもを娘さんと二人でして下さった住職は、翌朝は早くから高階保遠入道西忍の館跡を案内して下さった。やがて別れのときがくると、自転車を担いで、あの三、四十段もあるであろう石段を降り、またわざわざ船着場まで送って下さったのであった。いつまでもいつまでも、船が小さく、やがて見えなくなるまでも、手を振って別離を惜しんで下さっているのが、いまま、まさまざと見える。

聞けば、住職は、この島の人ではないという。では、この人が、この島にこられたのは何のためか。この寺に、これほどの愛着を持って生活しておられるのは何のためか。この人に、そうさせているものは、いったい何か。その、自己の人生に徹して、一筋の道を行く住職の姿が、いまま忘れられない。

あの住職のように、自己の道に徹している人も、世の中にはないわけではない。しかし、僕は、そうなれない。せつかく、真宗学を学びながら、これが、自分の道になってこない。学問と自分が平行線。まじめに考えようと試みても、いつの間にか自分は、真宗学の局外者になってしまっている。この平行線が

一つの点に交る日のために、僕は、努力しなければならない。真宗の教えを学ぶことが、ほんとうに自分の道になる日のために——。あの、己れの道に精進する住職のようになる日のために——。

祖師たちとともに

藤井善隆

今回の真宗学会の旅行を振り返って、二、三感じたままを述べてみたい。

真宗学とは、いうまでもなく、親鸞や法然の教えをおして仏教の真宗を学ぶことである。特に親鸞によって明らかにされた仏教の真の精神を学び、もって真実の宗教の意義を、われわれの人生に開き顕わすことであると思う。親鸞にしても、法然にしても、彼等独自の人生体験と、その人間的苦悩を通して、換言すれば生活体験を背景としてその道を聞き開いていったのである。したがって、それを学ぶ我々は、彼等の聖教の文字づらを読取るだけではなく、その生活の背景というものを感取し追体験してゆく思いをもって、彼等の語るところを聞かねばならぬのであろう。そうでなければ真宗の教学は、よく了解され難いではなからうか。

祖師達の立った場実際に我々が立ってみて、そこから祖師